－家のアルバム－

これは、家という建築での体験を、個人的な記憶から制作したものである。

家というものは、みんなの想いもそこでの環境も色んな記憶も詰め込まれている。すごく硬く四角く綺麗にかたどられているが、本当はこの中にはだれしも秘める素敵な体験がある。その記憶を一つのアルバムにまとめるように、一つの建築として現れる。家のアルバムである。

設計対象は私の家。
そして今回は、家への執着を一番感じる瞬間の「帰路」という道にも着目した。
自分の家までの帰路と、家の中に入ってからの体験を、自分の記憶をもとに抽象化させたものである。
制作方法は、まず帰路と家の体験を、その時の五感まで含めて日記小説として残した。帰路は全部で３ルートあり、私が主に利用する「駅から家」「大学から家」「カフェから家」の３つである。その３つ分のルートの日記と、日記から作ったスケッチを元に、計 40 シーンの記憶を取り出して、それらを繋ぎあわせ、空間化している。家は玄関に入ってからの記憶が空間化され、道は道のみの記憶が空間化されている。
家から始まる３ルートは、一つの家に集約されているため、３つの時空間が生まれている。
この模型を実際に歩いているわけではないが、建築スケールは統一されている。

これを可視化することで、現実世界では起こりえないバグが生じるところに面白さを感じている。
例えば、玄関が３つがあったり、兄の部屋が二つあったりする。そこで交わる動線空間も含めて設計した。断片的な記憶を接合することによって起こるバグは、現実の家や街をそのまま作るより、はるかに実際の体験に近くなっている。夢想空間だが、なるべく直接的なまとめ方をしていくことで、より私の感覚を広げてくれる。「建築物」は一つだが「建築の体験」は個人的なものであり、その体験によって、実際の家とこんなにも違う姿になりえる。建築は全て記憶から始まっており、最後にはみんなの記録となる。私にとっての家とは何なのか、私の家のイメージを深く考えるための作品であり、建築プログラムのいち提案を示すチャレンジになっている。

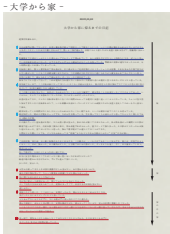
家のアルバムの製作方法

帰路と家の中での体験を、その時の五感まで含めて日記小説として残す。帰路は全部で３ルートあり、主に私が利用する「駅から家」「大学から家」「カフェから家」の３つである。
その３つ分のルートの日記と、日記から作ったスケッチを元に、計 40 シーンの記憶を取り出し、それらを繋ぎあわせ空間化している。

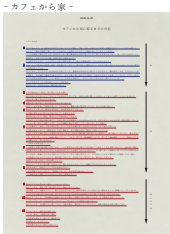
記憶から製作した日記小説での記録

－駅から家－

－大学から家－

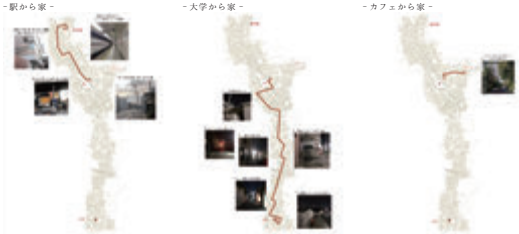


－カフェから家－



三つの帰路から一つの家までのルート

－駅から家－　－大学から家－　－カフェから家－



日記小説から描いたスケッチでの記録

三次元空間での記録

「家」部分模型 1/30

「家」抽象模型 1/50

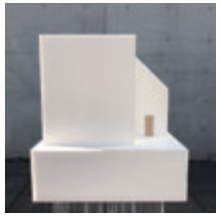
「帰路 大学」抽象模型 1/50

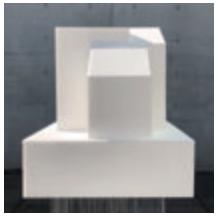
「帰路 駅」抽象模型 1/50

「帰路 カフェ」抽象模型 1/50

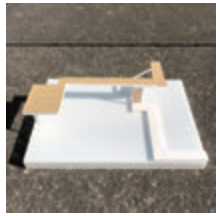
設計対象：私の家

私の家の外形モデル

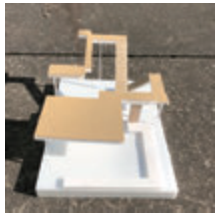




家の中で歩行した部分のみの模型



大学からの家の中

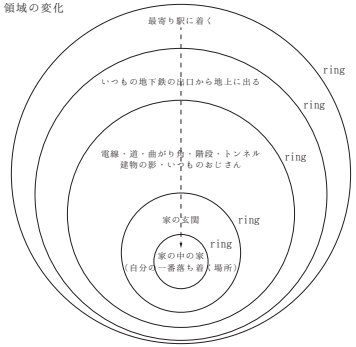


駅からの家の中

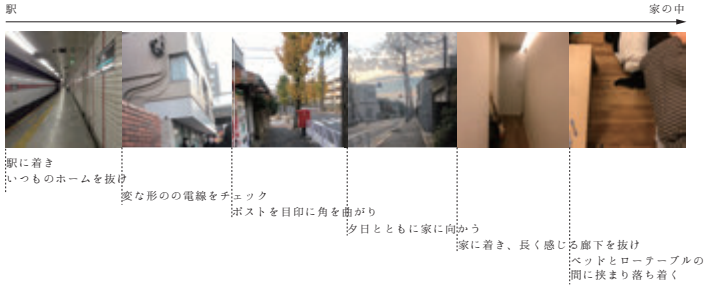
カフェからの家の中

家への執着を一番感じる瞬間の「帰路」という道にも着目した。
最寄駅についただけで家に帰ってきたような安心感が始まる。さらに家に進むにつれ、様々な外的要素を肌で感じながら安心感を高めていく。
「帰路」－「家の玄関」－「家の中の自分が一番落ち着く居場所」この境界のリングを何重にも通っていき、求めた場所に行き着く。

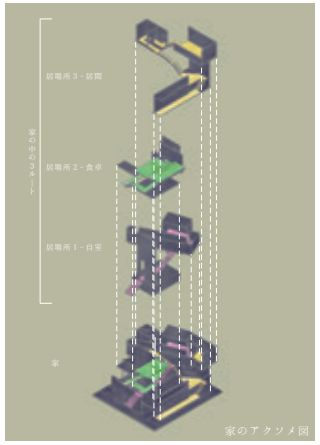
領域の変化



ルートの一例



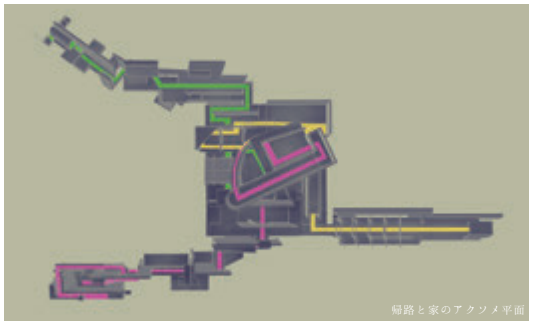
道を含めた家までの全体像が「大きな家」
家自体が「小さな家」と捉える。
家は玄関に入ってからの記憶が空間化され、
道は道のみの記憶が空間化されている。
家から始まる３ルートは、
一つの家に集約されているため、
３つの時空間が生まれている。



家のアクソメ図

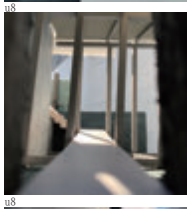
家の抽象模型

帰路と家の抽象模型


帰路と家のアクソメ平面

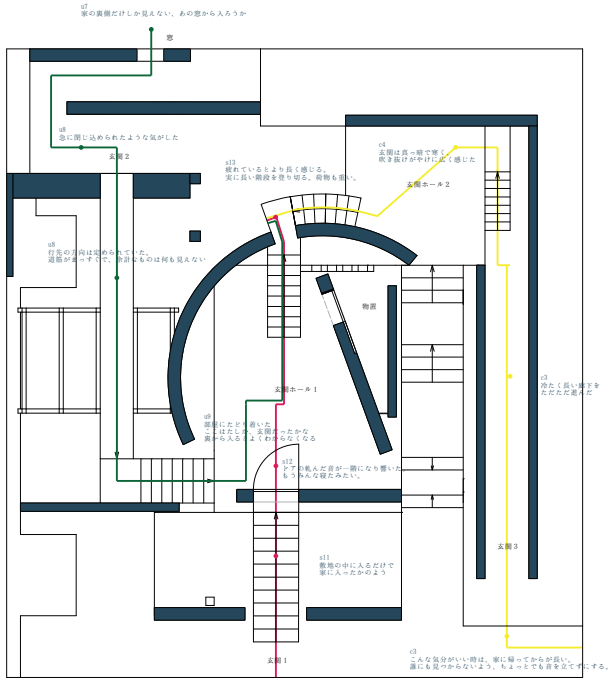
u7

u8



u8

u9



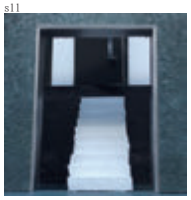
PLAN　1F

c4

c3

c3

s11

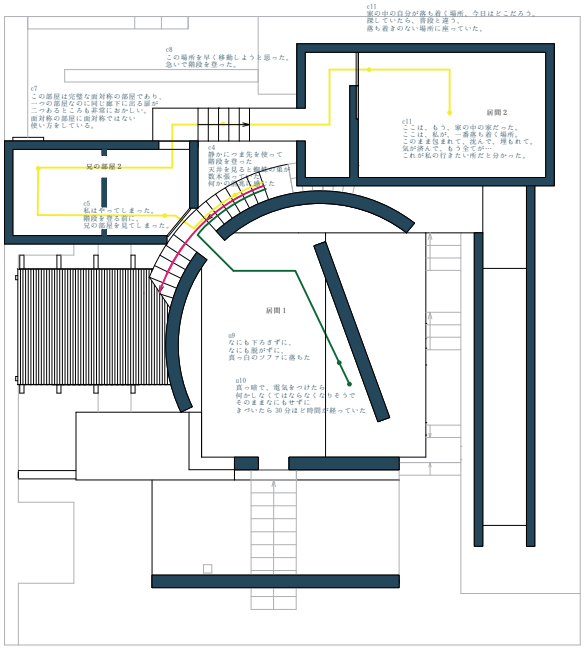


c4

c5

c7

c11



PLAN　2F

c4

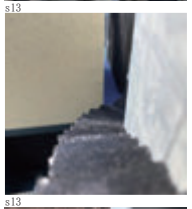
u4

u9

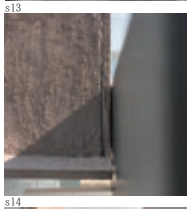
u10

s13

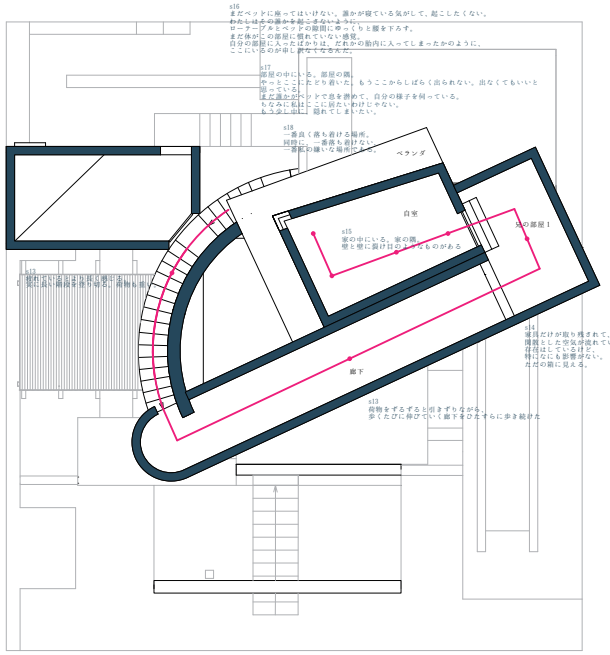
s13



s13



s14



PLAN　3F

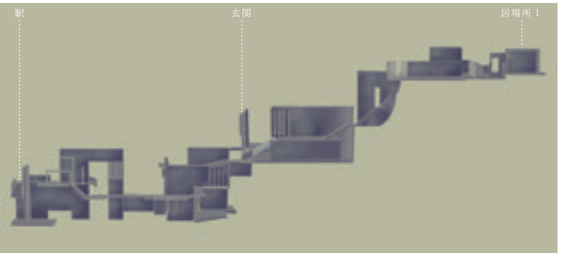
s13

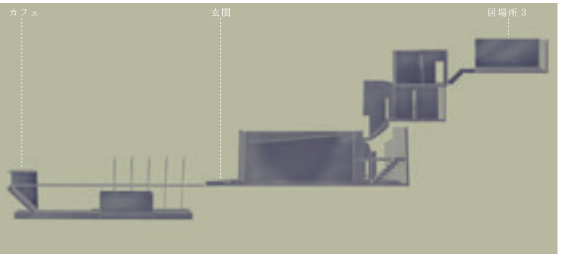
s14

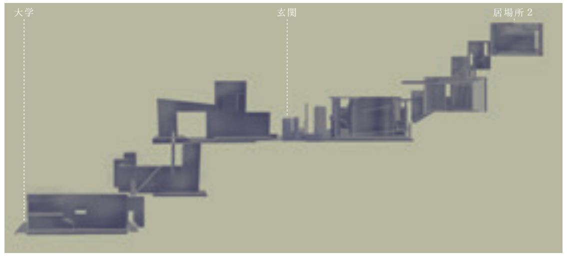
s17

s18

歩行空間の断面展開図







「最寄駅から家までの帰路」と「家の中」の体験を、そのときの五感まで含めて日記小説として残す

2006,012,18

駅から家に帰るまでの日記

駅に着いた。

1 電車の扉が閉まるギリギリに目が覚めて、急いで立ち上がると携帯を落としてしまった。まわりからジロジロと見られるのは酷だ。急いで拾って電車から飛び出す。スン、と無音になった感覚、何もない空間になる。電車が徐々にスピードを増して、遠ざかっていくのを見ながら、悲しい気持ちになってゆく。他に忘れ物はないか、と思いながら荷物に手を入れると、冷たい魔法瓶に手が触れた。きっと忘れ物はない。エスカレーターの方向に向かいながら携帯を取り出した。

2 17時 13分、改札を抜けた。左の階段を登っていく。風が冷たい、登るのに凄く体力を奪われる。

いつもまだやってる立ち飲み屋、まだやってたみたいだ。

人がいっぱいで外で寒そうにタバコを吸ってる 2人組がいる。特に話すことはなさそうな顔をしている。

駐車場の鍵を探す時には、もう明かりが見えて着て、ワイン色のネイルが剥げているのがわかった。なかなか遠いところに停めちゃったな、丁寧に歩けないほど寒い。少し雨が降ってたせいか、サドルが濡れていた。ハンドルもキンキンに冷えている。布団みたいなダウンのフードを完璧にかぶって、ペダルを押した。

3 猛スピードで駐輪場を出ると顔面に冷気が当たって、冬が本気を出したなと思った。

そのまま暗い道の角を曲がって、後ろをすぐ振り向いた。誰かが後をつけてるような気がした。壁の裏に隠れる。

コンビニの毛部を背に座ってるタバコの兄ちゃんがいつもより寒そうで、話し相手も居ないようで、寂しそうに見えた。

信号が青になりそうな時、待ってる人々が少し前のめりになって歩き出そうとする。青になると出足鋭くわたしの自転車はみんなを追い抜いた。

4 この閑散とした商店街は、店が変わるのが一段と早い気がする。行ったことない店ばかりだ。あのイタリアンがどんな味なのか、中にいる店員の性格も、何も知らない。

5 この道は難関でチェックすべきポイントが 2つある。斜めに道を曲がると、外壁のルーバーが取れている家がある。

6 そして少し道なりに歩いた後の電線だ。丁度斜め 60度くらいに見えるところ、人相の悪い熊に見える瞬間があるのだ。この角度しかわからない。きっとここに怖い熊がいることなんて誰も知らないだろう。長く見るためにゆっくり自転車を漕ぐのがポイントだ。ほら、すぐに熊じゃなくなった。いつしかこれらチェックせずには通れなくなっている。

7 信号とコンビニの灯りが、濡れた路面に反射して、とても綺麗だった。

8 大通りの高架下を抜ける。ここは暑い日も寒い日も寒く感じる。きっとみんな感情なく通り過ぎる道なんだと思う。

9 いつもの川に辿り着く。川の始まりの位置に、狼と鶏が向かい合った銅像がある。このふたりが門番をしてくれてるから、この川は守られている感じがする。扇型のタイルが敷き詰められたこの道は、一粒一粒の個性が垣間見えて、少し安心する。この緑道は、春になると幻想的な桜並木を見せてくれる。今は寒いから、早くここから抜けたい。そして暖かい家に、今すぐに帰りたい。

10 町の掲示板を何も考えず目を向けて、内容は見ようとせずに通り過ぎる。冷たい風が首すじを通る。家に着く直前の情景は、奥に見える夕陽が小さい隙間から光が長く伸びていて、歩く方向を強く指し示してくれている。左に電柱の境界を作っている、道路には出たら帰れない。そんなことを考えながら右を向くと家に着く。

街

11 家は玄関の前に立つだけで安心する。今日は一段と寒かった。

敷地の中に入るだけで家に入ったかのようである。

ツリーの光が中から漏れ出していた。ドアの前に立つ。

12 頭の中で想像して、玄関から入って、家の中には誰がいる？ヒトは、見えないものを想像する生き物である。

（光の点滅を残しながらリビングを見上げると、愛犬がジッとこちらを見ていた。）

ドアの軋んだ音が一階になり響いた。もうみんな寝たみたい。

家

13 真っ暗な玄関を真っ暗なまま、靴を脱ぎ、階段を登る。疲れているとより長く感じる。実に長い階段を登り切る。荷物も重い。さっきまで肩にかけていた荷物をずるずると引きずりながら、歩くたびに伸びていく廊下をひたすらに歩き続けた。

14 わたしの隣の部屋は常にドアが空いている。兄の部屋だ。今はもういなく、別の場所に住み移った。家具だけが取り残されて、閑散とした空気が流れている。存在はしているけど、特になにも影響がない。ただの箱に見える。

いったん住人がいなくなると、まるで 50年も前から廃墟であったかのように変化している。

ようやく自分の部屋にたどり着いた。また一つ、部屋を乗り越えた。

15 家の中にいる。家の隅。壁と壁に裂け目のようなものがある。外の電灯が、窓からすっと差し込んでくるのが眩しい。

とりあえず、もっていた全ての荷物を、肩からゆっくりと下ろして、着ていた上着を丁寧にかけた。

16 まだベッドに座ってはいけない。誰かが寝ている気がして、起こしたくない。わたしはその誰かを起こさないように、ローテーブルとベッドの隙間にゆっくりと腰を下ろす。まだ体がこの部屋に慣れていない感覚。自分の部屋に入ったばかりは、だれかの胎内に入ってしまったかのように、ここにいるのが申し訳なくなるんだ。

17 部屋の中にいる。部屋の隅。やっとここにたどり着いた。もうここからしばらく出られない。出なくてもいいと思っている。まだ誰かがベッドで息を潜めて、自分の様子を伺っている。

18 ちなみに私はここに居たいわけじゃない。もう少し中に、隠れてしまいたい。

あの部屋の隅っこに穴があいている。あの穴はずっと前から空いている。そこからはすべてものが見えるし、全てのことがわかって、一番良く落ち着ける場所。同時に、一番落ち着けない、一番私の嫌いな場所である。

行きたいけれど、中には入れない。いや、本当のことを言うと中には入れる。入ってもあの感覚にはなれないだけだ。あの感覚になったら、今までの私の全てが終わってしまう気がしてる。

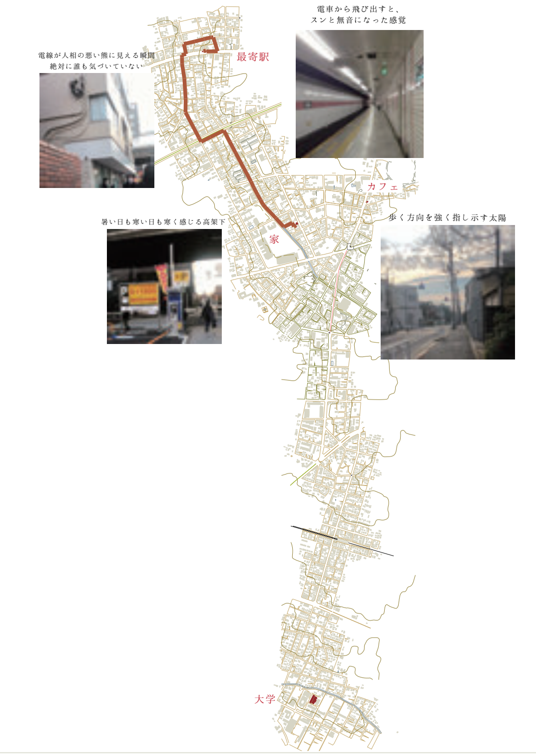
家の中の家

19 気づいたら朝になっていた。

穴は無かった。

絨毯の上で寝ていた、真っ白の部屋だった。

「最寄駅」から「家」までの帰り道の地図を記録



「大学から家までの帰路」と「家の中」の体験の、五感まで含めた日記小説

2022,12,01

大学から家に帰るまでの日記

建築学科棟を出た。

1 今日は裏門が開いてないけど、友達と柵を飛び越えて時短ルートで帰ることにした。いつこの鎖が壊れるかわからないカタカタとうるさい 1.8メートルほどの檻に手をかけて、勢いよく飛び越えた。余裕じゃんと話しながら友達に別れを告げて、駐輪場に向かった。

2 駐輪場までの道はしっかりとした柔らかいプロムナードで導かれていて、あとは帰るだけだなという気持ちになる。ぽつんと待っている自転車を迎えに行った。カラスもぴょんぴょんと跳ねながらこっちを待っていた。警備員の挨拶が適当なおっちゃんは、もう時間が遅いため帰ってしまっている。

3 自転車に乗り、悠々と漕ぎ始めて角を曲がる。右に曲がるとご近所名物のイルミネーションのお屋敷。それをまぶたの奥で見ながら左へ曲がった。いつもこの水路を横に走りながら、この水路がどれだけの人に感じられながら横を歩かれてるんだろうと思う。以外にも深くて、超えられそうで超えれないガードレールに囲まれている。

坂をぐんぐんと登って行って、これは電気の力を借りないと私みたいな貧弱な者には絶対に登りきれないだろうなと思っている。

4 四年前ぐらいまで、ここの坂は夜になって 20メートルくらい手前から見ると、奥の住宅との界の塀がアスファルトの色と同じ色に近づいて、90度の擁壁になると確信していた。

そこの奥には何も見えない、何者がいるかわからないくらい大きな擁壁で、誰も登ることの出来ないモノリスのようであった。いつからか、そんなことを思わなくなったのは、なにがきっかけだったんだろう。

友達が見えてきた。どんなに自転車を取りに行くのに時間がかかっても絶対に友達に追いつくようになっている。ちょうど急な登り坂をすぎたときに自転車をおりて、いつも距離が会話はしづらいけどどうにか頑張りながら友達と並走してたわいもない話をして帰る。

踏切を待っている時間はなにをしたらいいのかわからないくらい暇である、といつも踏切の前でこのことを考えている。

5 最近気付いた、隠れた灯篭をチェックする。なぜか生き残っている。生き残ってなくちゃ困るんだと思ってなんとなく残したであろう隠れた灯篭。

その奥のラーメン屋を曲がる角に、なにか黒い影が見えた。私はそれが怖くてたまらなかった。私が角を曲がった瞬間にその影が瞬発で追いかけてきた。右肩を強く掴みに来た。角を直進すればよかった。猛スピードで振り払った。その影がどうなったかは振り返らなかった。見てはいけないと思った。無心で漕ぎ続けて大通りにでることができた。

人間はどんな酷いことでも、どうなるかわかってる”恐怖”よりもどうなるか予測がつかない”不安”の方が怖い。

6 ご近所名物、家の前、少し雑に装飾された木に目をやる。この雑さが、いつもの木であることに安心する。奥には、対抗するようにもう一つ、木が、無かった。また嫌気がさした。十字路でまたあの影がいた。さっきよりも遠く、早く、また捕まってしまう。恐ろしかった。

急いで逃げた。人目につくような広い道にでた。

本当に安全な場所はどこ？なぜこんなに怖い思いをしなければならないの？

緑道の端の煙をかき分けながら、ずんずん進んで家についた。

少しだけ、安心した。

街

7 大学から帰ってきたときは家の裏側だけしか見えない、あの窓から入ろうかな。

後ろの家の塀を登って、ちょっと敷地をお邪魔しながら裏からはいった。

8 急に閉じ込められたような気がした。

耳が急に塞がった感覚があった、閉じてからなにも音がしなかった。

そして行先の方向は定められていた。道筋がまっすぐで、余計なものは何も見えない。

道しかない。

家

9 部屋にたどり着いた。ここはたしか、玄関だったかな。裏から入るとよくわからなくなる。

気づいたときにはリビングにたどり着いていた。

とりあえずなにも下ろさずに、なにも脱がずに真っ白のソファに落ちた。

静かな部屋に、ぼふんと音が響いた。玄関を眺めながら、誰か入ってこないよな、見える位置に移動したくなった。

いつもこのソファの右っ側の、もう誰もわたしの右っ側に入り込めないくらい右っ側に座って、ひとりで、きゅうきゅうになりながら、クッションに挟まって座る。

10 真っ暗で、電気をつけたら何かしなくてはならなくなりそうだから、そのままなにもせずに。

きづいたら 30分ほど時間が経っていた。

家の中の家

「大学」から「家」までの帰り道の地図記録

「カフェから家までの帰路」と「家の中」の体験の、五感まで含めた日記小説

2016,11,26

カフェから家に帰るまでの日記

カフェを出た。

1 すごく疲れたし、もう深夜の 2時半になる。バイトが終わって賄いを食べた後なので非常に満腹感がある。しかし気分は悪くない。むしろここ最近で抜群に良い。カフェの出入り口を開けてからずっと水面を歩いているような気分だ。

ノートの端を三角にちぎった、小さなたった一枚の紙切れを大切に持っている。思っても見なかったし、決して手に入れることの出来ない、大きくて小さい物。大切に持って帰らないと。

ただ帰るだけなのに、こんなにもいつもと気分が違って、周りの風景が美しく見えるものなんだ。

2 この、木々に挟まれた肌寒い夜道。普段感じる、珍しく、暗く怪しい感覚がない。今はその怖い道の上のほうを歩いている。穏やかな道となっていた。

歩いてると、下にタクシーが 2台ほど止まっている。運転手が足をあげて寝ているのが分かる。横を通るときは、その人がいつ目を覚まし、手が伸びて捕まるかわからない。そんな怖い思いを必ずする道だ。それも今はその上を歩いているので、タクシーがいることが安心材料である。いてくれないと、なおさら通れない。タクシーがいてありがたい道になっている。

ずっと下をみていたら首が痛くなって、前を見た。

家があった。今日はなんか一瞬で家に着いた。

街

3 こんな気分がいい時は、家に帰ってからが長い。

誰にも見つからないよう、ちょっとでも音を立てずにする。今銃声が鳴り響いたら多分とんでもなく反響しそうなどを考える。

冷たく長い廊下をただただ進んだ。

4 玄関は真っ暗で寒く、吹き抜けがやけに広く感じた。

静かにつま先を使って階段を登った。天井を見ると蜘蛛の巣が数本張っていた。何かの前兆に感じた。

5 私はやってしまった。階段を登る前に、兄の部屋を見てしまった。

私の隣の部屋は兄が家を出る前に住んでいた部屋である。

嫌な思い出しかない部屋。寝るときに空気が淀んでるんだ。

それはベッドの高さが妙に高くて、天井と近いのが原因というのは分かっていて、さらにはベッドよりも高い家具が置いてないから、より高い所にいる感じがする。巨大な球体の頂点で寝そべっているような、そんな感じ。

6 ここで寝ると、決まって見る夢がある。そういうものは他の皆にも存在するのだろうか？教えて欲しい。

その夢は何かと言うと、風景は今いる同じ部屋で、あの球体の頂点に仰向けで寝そべっている。

しばらくすると体が 30センチ程宙に浮きはじめる。それから数分後に姿の見えない何者かに、体に触れていないのに、動かされている。平行にゆっくりと、風船を動かすように。これは、俗にゆう幽体離脱なはずだ。夢の中で幽体離脱している。最後はそのまま玄関に行き、外に出される。

この夢をほぼ毎日見ていた。

7 この部屋は完璧な面対称の部屋であり、一つの部屋なのに同じ廊下に出る扉が二つあるところも非常におかしい。面対称の部屋に面対称ではない使い方をしたら、それはおかしなことが起きてもしょうがない。引っ越し祝いに親戚から貰った 2人の天使が向き合った絵は、額縁からはみ出て落ちそうになっているのに誰も直さないし、その向かいには行き場を失った無駄に大きい鏡が。

その部屋から出ようとしたとき、扉の前に人がいた。ぼやけてよく見えないが、知らない人だった。

心配そうに私に向かって何か喋っている。

聞こうとしてるけど何も聞こえなかった。頭の中がふらふらしていて視線の先を見るのがやっとだった。

8 今自分が誰で、何をやっているのかもわからない。

これを理解するのにものすごく時間がかかった。私は部屋で横たわっていた。

この場所を早く移動しようと思った。急いで階段を登った。

家

9 家の中の自分が落ち着く場所、今日はどこだろう。

探していたら、普段と違う落ち着きのない場所に座っていた。

肩に掛かっていた鞄を下ろして、鞄の中身を全て出した。何か作業をしろと自分に言い聞かせるように綺麗にテーブルに並べた。

このソファに座った 1人の人間、なにかひとつでもこの世界の出来事をうまく使いこなせているのだろうか。

10 わからなくなって、一本感動的な映画を見た方が豊かな時間を送れる気がしたから、もう映画を見ることにした。

キッチンに行って、つまみを持ってきて、コップには 1：1で熱湯と水を入れた。

席についたら、犬が膝の上に乗ってきた。白湯を飲む。最近寒くなってきたから、熱湯の割合が自然と増えてきた。

11 ここは、もう、家の中の家だった。

ここは、私が、一番落ち着く場所。

このまま包まれて、沈んで、埋もれて。

気が済んで、もう全てが…

これが私の行きたい所だと分かった。

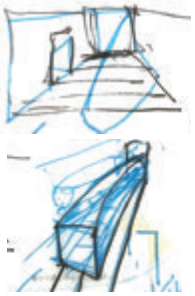
家の中の家

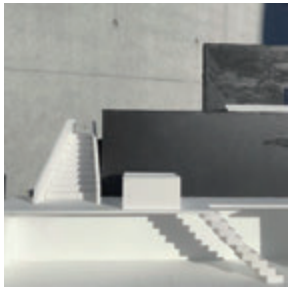
「カフェ」から「家」までの帰り道の地図記録

家のアルバムの記録の仕方　（駅 - 家 - 居場所）

1 シーン目

電車の扉が閉まるギリギリに目が覚めて、急いで立ち上がると携帯を落としてしまった。
まわりからジロジロと見られるのは酷だ。
急いで拾って電車から飛び出す。スン、と無音になった感覚、何もない空間になる。電車が徐々にスピードを増して、遠ざかっていくのを見ながら、悲しい気持ちになってゆく。

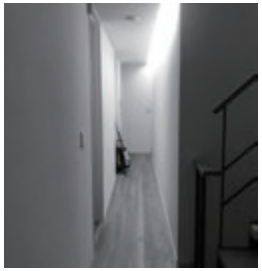




13 シーン目

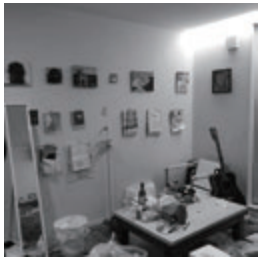
真っ暗な玄関を真っ暗なまま、靴を脱ぎ、階段を登る。疲れているとより長く感じる。実に長い階段を登り切る。荷物も重い。さっきまで肩にかけていた荷物をずるずると引きずりながら、歩くたびに伸びていく廊下をひたすらに歩き続けた。

14 シーン目



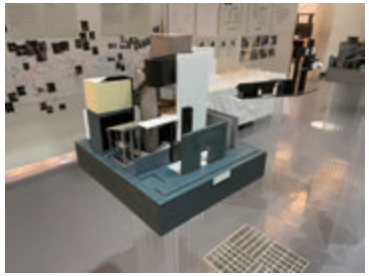
わたしの隣の部屋は常にドアが空いている。兄の部屋だ。今はもういなく、別の場所に住み移った。家具だけが取り残されて、閑散とした空気が流れている。存在はしているけど、特になにも影響がない。ただの箱に見える。
いったん住人がいなくなると、まるで50年も前から廃墟であったかのように変化している。

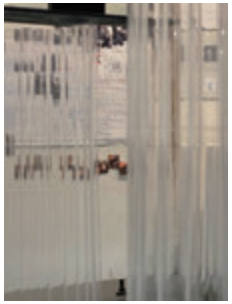
17 シーン目



まだベッドに座ってはいけない。誰かが寝ている気がして、起こしたくない。
わたしはその誰かを起こさないように、ローテーブルとベッドの隙間にゆっくりと腰を下ろす。まだ体がこの部屋に慣れていない感覚。自分の部屋に入ったばかりは、だれかの胎内に入ってしまったかのように、ここにいるのが申し訳なくなるんだ。

展示風景

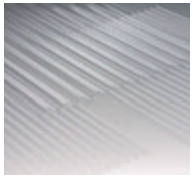




模型台の製作「tou stand」

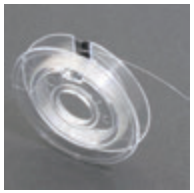
この作品を初めて見た人にとって、私の世界観になるべく入ってもらいやすいように心がけ製作した。
まずは地上から目線の高さまで上げ、模型のアウトラインの影が素直に床に落ちるように、透明の波板を曲げて、テグスで二箇所結び、自立する柱となった。
透明にすることで模型台の存在感を消し、模型の世界観を主張できるように。
そして今回のテーマに沿うべく、私の繊細な感覚によって作られたこの作品と合わせて、最小限の構造で繊細に自立する物とした。

波板



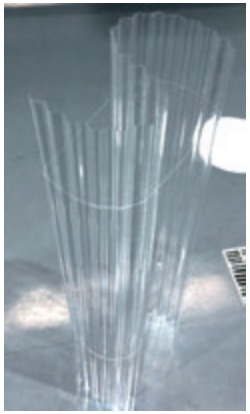
＋

テグス



＝

tou stand



床に落ちる模型台と模型の影

結んだテグスに挟む